第３章　歴史

第１節　先史　　大石遺跡と縄文農耕、古墳時代の横穴墓

１　大石遺跡と縄文農耕

緒方盆地における文化的景観が形成される以前の歴史はどのようなものであったか。旧石器時代から古墳時代を通じて緒方盆地を取り巻く歴史的環境について概観してみたい。

まず、大石遺跡に触れる前に、さらに前史について簡単に述べておきたい。緒方盆地周辺に人々が住み始めたのは後期旧石器時代からである。平成元年（1989）から２年（1990）にかけて町営総合グラウンド建設にともなって調査された千人塚遺跡（標高 220m）で、ナイフ形石器や三稜尖頭器、削器などが出土している。これらの石器群は AT（姶良丹沢火山灰層）上位の石器群の組合せであり、２万数千年前と想定されよう。盆地周辺では表面採集された旧石器は見られるが、旧石器時代の遺跡は多くはない。同じように、縄文時代の遺跡も少ない。まとまったものとしては、縄文前期中葉に属する轟Ｂ式土器の新しい段階と野口・阿多タイプといわれる曾畑式土器への移行期の土器、瀬戸内地方の押引文土器などが千人塚遺跡から出土している。盆地内では緒方川の河岸段丘にあたる牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡、大坪遺跡などで縄文後期から晩期終末の土器とともに扁平打製石斧などが散見される。盆地内でわずかながら縄文人の活動が見て取れる。

ところで、緒方盆地には直接接していないが、緒方盆地の南西部に位置する大石遺跡は原始的な農耕を示唆する代表的な遺跡である。祖母山北麓の標高 350m前後の火山灰台地上に位置し、昭和 33 年（1958）から 41 年（1966）にかけて別府大学の賀川光夫を中心に５次にわたる発掘調査が実施された。調査の結果、住居跡を想定させる柱穴群、大型の竪穴遺構、夥しい数の土器や石器群が出土した。土器は表面が黒く磨かれた黒色磨研の浅鉢形土器、粗製の深鉢形土器に丹塗の鉢形土器が組合わさり、晩期初頭の「大石式土器」が設定された。石器は、安山岩製で採集や耕作具の刃先と推定される扁平打製石斧、収穫具とされる石庖丁形石器などが多量に出土した。また、磨石や石皿に加え大陸では穀物粉砕具と考えられる磨棒、磨盤の出土が注目される。

写真１　大石遺跡全景（南から）

大石遺跡は半ば定住的な大遺跡で、縄文時代の伝統的な生業である狩猟・採集にかかわる遺物群に加え、刃部の磨滅した例を含む多量の扁平打製石斧、磨製や打製の石庖丁形石器、石鎌形石器、磨棒、磨盤などの出土から稲作開始以前に、火山灰台地での畑作物を中心とした原始的な農耕が行なわれていた可能性が高いといえる。似たような遺跡は大野川中上流域に集中する傾向にあり、縄文晩期には畑作農耕の広がりが見て取れる。

なお、大野川中上流域では弥生時代になっても遺跡の立地条件は変わらず、弥生後期まで畑作農耕が引き継がれることになる。

２　古墳時代の横穴墓

緒方盆地周辺では縄文時代と同様、弥生時代の遺跡も少ない。先にあげた千人塚遺跡で弥生中期後半の住居址群が５軒発見されているのが唯一の例であろう。そのほか、盆地内での生活の痕跡は明瞭でない。理由ははっきりしないが、大野川中上流域では弥生後期から終末期にかけて火山灰台地上に多くの大集落が展開するのと対照的である。大野川中上流域の遺跡群は多量の鉄器を保有し、約半数は鉄鏃で、そのほか手鎌（摘鎌）や鉄鎌、鋤先、鍬先などの収穫具や耕作具が一定程度含まれている。出土鉄器は狩猟と畑作が継続して行なわれていたことを想起させる。

緒方盆地周辺で迫田の開発が始まるのは古墳時代後期の６世紀代になってからである。古墳時代前・中期の様相は明確でない。一方、隣の三重盆地では６基の前方後円墳を含む古墳群が造営され、首長墓の系譜が見て取れる。緒方盆地に最も近い首長墓は、５世紀代に属する越生の漆生古墳群である。しかし、古墳群の立地からみて被葬者は緒方盆地を治めた首長ではなかろう。

６世紀代になると、緒方川に流れ込む中小河川の流域に横穴墓が造営されるようになる。大きく分けて、緒方盆地西側の川入川流域、盆地北側の上自在地区、盆地南側の清田川流域である。

以下、横穴墓の概要についてみておこう。川入川流域の井ノ前横穴墓は４基から５基で構成され、やや大型でドーム状の天井を持つ横穴墓が造営開始期のものである。あとは改葬骨か火葬骨を入れたと考えられる小型のものである。６世紀末から７世紀いっぱい使用されたものであろう。小宛横穴墓群は残りの良い５基から構成され、最も高い位置に造営された横穴墓が造営開始期のものである。玄室の縦横幅が２mを超え、奥には幅約 70 ㎝、高さ７～８㎝の奥屍床（写真２）を造り付けている。他の３基も玄室の残りは良く、６世紀後半から末にかけて造営されたものとみられる。簡略化されたものは７世紀半ばまで下るものであろう。

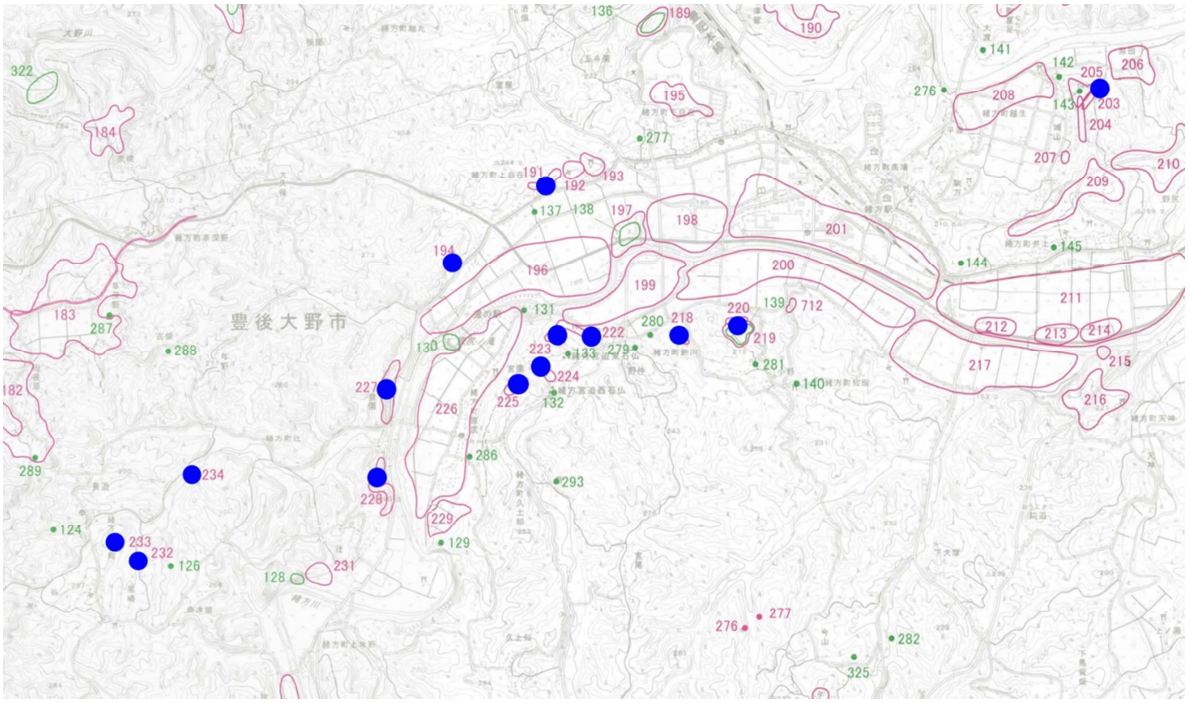

図１　緒方盆地周辺の横穴墓分布図（「大分県遺跡地図」に加筆）

上自在地区に分布する横穴墓群は規模が小さく、時期的にも新しいものが多いようである。清田川流域では、野仲横穴墓群が３基で構成されている。中心の横穴墓は６世紀後半代とみられ、飾縁が良く残り、向かって左側に宝塔のレリーフが追刻されている。宮迫東石仏の隣に位置する大日上横穴墓群は大型の横穴墓５基が整然と並んで造営されている。さらにもう１基は石仏側に

位置し、現状で6基確認できる。飾縁もしっかり残り、玄室は方形でドーム型の天井を有している。6世紀後半代を中心としたもので、連続して造営されたことが窺える。清田川流域の有力集団の墓地であろう。また、近くの宮園横穴墓群は20基近くが確認でき、緒方盆地を取り巻く横穴墓群では最も基数が多い。少なくとも4群に分かれて造営されている。それぞれのグループには古い形式が含まれ造営開始期を示しているものであろう。中には屋根の鴨居を掘り込んだ横穴墓も確認できる。6世紀後半代から7世紀いっぱいまで下るものも存在する。時代は異なるが、宮迫東石仏や宮迫西石仏群周辺に有力な横穴墓が多い。

写真2　小宛横穴墓群の中央に位置する横穴墓の奥屍床

緒方盆地周辺のすべての横穴墓には触れられなかったが、横穴墓は緒方川に流れ込む中小河川流域の阿蘇溶結凝灰岩を穿って数基単位で造営されている特徴がある。造墓主体は、当時の迫田の開発を担った集団と集落に関係しているとみられ、特に清田川流域の開発面積が広く、有力集団の形成につながった可能性がある。横穴墓の副葬品は明らかでないものの、江戸時代には六箱横穴墓が偶然発見され、鉄刀や轡、鉄鏃などが出土し、副葬品の一端が明らかになった。

なお、古墳時代までの開発は中小河川流域までで終始し、緒方盆地の平野部までには及ばなかった。緒方盆地の文化的景観の形成は、平野部に井路を整備し、開発が大きく進展した次の時代を待たなければならなかった。

【参考文献】

緒方町教育委員会『千人塚遺跡』1999

緒方町歴史民俗資料館『緒方町誌・総論編』2001

第２節　古代　　伝承と緒方条里の開発

１　古代の辺境緒方と三輪信仰と八幡信仰

古代のヤマト国家にとって、豊後国の南部、大野郡・直入郡は国境防備の最重要地帯であった。『日本書紀』には、景行天皇 12 年 10 月、天皇が九州征西の途中、豐後國速見郡に住む速津媛（はやつひめ）に 「直入縣（なほりのあがた）禰疑野（ねぎの）に住む打猿（うちざる）・八田（やた）・國摩侶（くにまろ）」という土蜘蛛の情報を聞いて、征伐するため來田見邑（くたみのむら）（朽網郷）に入り、行宮（かりみや）を設けて群臣（まへつきみたち）と土蜘蛛を討つための議（はかりごと）をされ、賊を討とうと、志我神（しがのかみ）（豊後大野市志加若宮）・直入物部神（なほりもののべのかみ）（竹田市籾山八幡宮）・直入中臣神（なほりなかとみのかみ）（由布市庄内町阿蘇野直入中臣神社）の三神を建てこれに祈ったといわる。これは、都処野（竹田市）の行在所の周囲に神は天皇を守るように配置されたと考えられる。

一方、『豊後国風土記』が伝えるところの大野郡の「海石榴市・血田」の伝説によれば、景行天皇のとき、鼠石窟土蜘蛛を討伐するため、群臣に詔して、海石榴の樹を伐採して椎（つち）を作って武器となした。勇猛な兵士にこれを授けて、土蜘蛛を襲撃し殺し、踝（くるぶし）が没するほどの血が流れた。「椎」を作った場所を「海石榴市」といい、血が流れた場所を「血田」といったという。

この「血田」は、緒方盆地の南側の「知田」と推定される。緒方川を挟んで北側には上市、下市などの「市」の地名があり、「海石榴市」の「市」の流れを汲む可能性が高い。この「海石榴市」は大和の「海石榴市」と同じ名前をもつ市で、この伝説は大和川と三輪山が接する場所にある大和の「海石榴市」を強く意識した伝説と推定される。大和の「海石榴市」は三輪山の南麓に当たり、西麓には大神（おおみわ）神社が鎮座し、その北西には、纒向遺跡や日本最古級の前方後円墳である箸墓などがあるヤマト国家の重要拠点にある古代でも最も有名な市であった。

なぜ、豊後国大野郡の南部の緒方の地に、このような市が成立したのであろうか。この地は日向国に接する境界地であり、この山の向こうは天孫降臨の地高千穂の峰である。ヤマト国家の西の境界であり、緒方盆地は祖母・傾山系の山麓にあたり、祖母山（古名姥が嶽）には、大和の三輪山の伝承と同じ、大蛇伝説が残り、この山の両山麓には、大神神社の神官大神氏と同姓の一族が古代から蟠踞することに注目したい。

写真１　『平家物語絵巻』緒環

『平家物語』の緒環の項には、平安時代末の緒方荘の在地領主で、源平の内乱期、反平家方として活動し、内乱の風雲児となった緒方惟栄（惟義）の次のような始祖伝承が載せられている。

かの惟義と申すは、恐ろしき者の末にてぞ候ひける。たとへば、昔豊後国の或る片山里に女ありき。或る人の独娘、夫もなかりけるがもとへ、男夜々通ふ程に、年月も隔たれば、身もた

だならずなりぬ。母、これを怪しんで、(略)「さらば、朝帰りせん時、標を附けて繋いで見よ」と教へける。娘、母の教えに随ひて、朝帰りしける男の、水色の狩衣を着たりける首上に、針を刺し、倭文(しず)の緒環という物を附けて、経て行く方を繋いで見れば、豊後国にとっても日向の境、姥が嶽の下、大きなる岩屋の内へぞ繋ぎ入れたる。

「我はこれ、人の姿にあらず、汝、我が姿を見ては、肝・魂も身に添ふまじきぞ。はらめる所の子は、男子なるべし。弓矢打ち物取っては、九州二島に肩を隻ぶる者あるまじきぞ」と教えける。(略)、岩屋の内より、臥丈(幅)は五・六尺、跡枕辺(長さ)は十四丈(４２ｍ～４５ｍ)もあらんと覚ゆる大蛇にて、動揺して這ひ出たる。(略)　女帰りて程なく産をしたりければ、男子にてぞありける。(略)　あかがり大太とも云はれけり。かの惟義は、件の大太には五代の孫なり。

豊後大神氏系図によれば、大蛇は姥が嶽の山の神であり、高知尾明神の化身であった。大和の三輪山の伝説も三輪山の蛇神が人として里に下り、里の女性と交わり、大和大神氏が生まれたという話である。「み」は神であり、蛇を現す言葉である。それは「水」の「み」でもあり、水信仰の象徴であった。緒方川の源流に位置する竹田市神原には穴森神社という社があり、その社殿の裏には、伝説の大蛇が住んだという巨大な洞窟がある。その洞窟の奥からは、勢いよく水が流れ出していた。姥が嶽、高知尾は九州の三輪山とみなされていたのである。市の名を共通させたのもこの点を意識したためであろう。緒方の地には、古代から三輪信仰とかかわる水と山の文化が厳然と存在していたのである。

一方、この地は、八幡信仰の拠点でもあった。『八幡宇佐宮御神領大神鏡』には、「御封田（中略）豊後国壹佰拾伍烟　本封壹佰烟　大野郡伍拾烟緒方庄是也」と記載されている。緒方荘は大野郡に設定された封戸（ふこ）に起源があることがわかる。古代の郷は 50 戸を単位に編成され、緒方荘は古代の緒方郷 50 戸から成立した。封郷は豊前国宇佐郡とその近郡の上毛郡・下毛郡と隣接地豊後国国崎郡など宇佐八幡宮のある郡やその近隣に設定されている。しかし、大野郡の緒方郷の場合、宇佐から遠く離れた豊後国最南端にある郷である。しかも、ここは、平地の少ない大野郡ではまとまった緒方盆地という穀倉地帯をもち、条里遺構もあった。古代国家は、この国境地帯の穀倉地帯に国境を守護する宇佐八幡宮の神郷を設置したといえる。緒方郷は古代律令国家にとって特別な位置を占めた。

２　豊後大神氏と緒方氏

大分県の南郡一帯には、平安時代以来、姥ヶ嶽の大蛇、すなわち姥ヶ嶽大明神（祖母嶽大菩薩）を始祖とする大神氏の一族（緒方・臼杵・佐賀・佐伯・阿南・賀来・戸次・大野氏等）が蟠踞していた。『平家物語』と同じく、豊後大神氏系図の中には、豊後国に大神良臣の孫惟基が「あかがり大太」（大弥太という本もある）とするものがあり、豊後大神氏は良臣からはじまると記されている。大神良臣は、9 世紀末、豊後国の国司の次官である介として赴任したといわれ、その子庶幾が大野郡に郡領すなわち郡司となったといわれる。「あかがり大太」は祖母山（姥ケ嶽）の大蛇と里の姫花本の間に生まれたという伝説をもつ。

大神良臣（おおみわのよしおみ）は、9 世紀に中央で活躍した実在の官僚であり、壬申の乱の

功臣三輪子首（みわのこびと）の子孫である。貞観 4 年（862）兄の全雄（またお）とともに真神田朝臣から大神朝臣に改姓し、左大史（さだいし）を経て、肥後介、豊後介を歴任する（『日本三代実録』）、寛平 4 年（892）豊後介の任期を終えて帰京する際、百姓が惜しみ慕って良臣の子庶幾（これちか）を同国に留めるように請願した。そのため、庶幾は外従六位下（げのじゅろくいのげ）・大野郡の郡司職である擬大領（ぎだいりょう）に叙任され、子孫は代々郡司を務めたという（『豊後国志』）。

大和の大神氏は、大三輪神社の神官家であり、三輪氏、大三輪氏ともいう。大物主神（おおものぬしのかみ）の子大田田根子が三輪君などの祖であり、大物主神は三輪山の大蛇とされ、水神である。大田田根子は蛇神大物主と里の姫の間に生まれたとされる。

豊後大神氏の始祖伝承は、この大和大神氏の始祖伝承の焼き直しである。祖母嶽の大蛇の洞窟は、穴森神社の裏にあり、そこからは水が流れ出し、緒方川の水源となっている。豊後に定住した大神良臣の子孫は、天孫降臨の高千穂との境界の山である祖母嶽を三輪山に見立て、このよう大蛇始祖伝承を作り上げたのである。

３　緒方条里の開発

緒方盆地には、上自在、下自在と呼ばれる場所があり、この中心に三宮八幡宮がある。三宮は、12 世紀の末に、一宮・二宮とともに、緒方惟栄によって、創建されたといわれている。この三宮の裏山は京塚山といわれ、経塚が営まれた。江戸時代には、三宮の裏で 2 本の経筒が発見されるが、一つは今も地元に残されている。そこには永久 3 年（1115）4 月 18 日の年月日が記載されている。京塚山には 12 世紀の初頭には、経塚が営まれ、すでに聖地となっていた。自在という不可思議な地名は「八幡大自在王菩薩社」の「自在」に起源すると考えると、古代の宇佐宮の封郷の中心として「八幡大自在王菩薩社」が 9 世紀～12 世紀初頭までには自在の地に創建されていたと考えている。

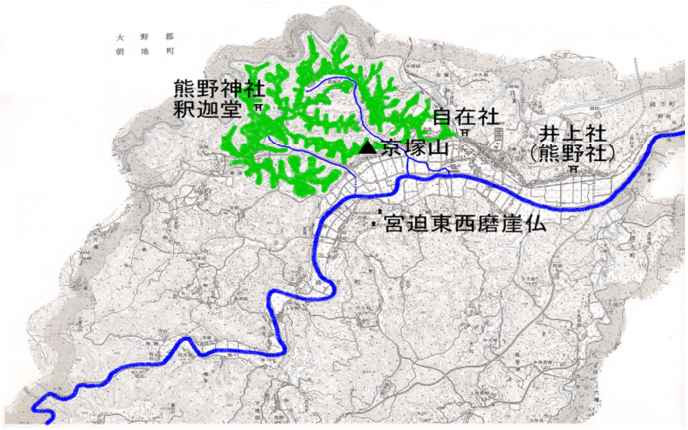

図 1　古代の緒方盆地の水利

自在地区、その裏の山間地にあたる軸丸地区は、緒方地区の古代の信仰拠点であった。京塚山の西側には、三宮の神宮寺跡といわれる場所があり、三宮、軸丸川を挟んだ丘陵の上には、若宮跡が存在した。さらに、軸丸川の水源地には、熊野社があり、そこには岩屋と神宮寺跡があり、ここには丈六の如来像と不動明王立像が安置されていた。現在は、この仏像は、豊後大野市歴史民俗資料館に保管されているが、12 世紀初頭まで遡る作品とされる。経筒埋納の時期や熊野社の仏像の時期の 12 世紀初頭までには、三宮の前身となる「八幡大自在王菩薩社」が整備されたと考えられる。

三宮（大自在王菩薩社）と神宮寺のある京塚山という古代の信仰の聖地は、黒土甲川と軸丸川という両川の水源地に熊野社が存在した。条里地区である井上地区の鎮守社も熊野社である。これは軸丸と井上地区の密接な関係を示している。12 世紀前半までは、緒方荘の領主宇佐八幡宮の支配拠点は上自在の「八幡大自在王菩薩社」（のちの三宮）であったと考えられる。

井上条里の主水源は、現在、原尻の滝の上を取水口にする下井路となっているが、次の節で詳しく述べるように、下井路を現在の滝の上からの取水に連結したのは、一宮、二宮、三宮を創設したといわれる緒方惟栄の時代と考えられる。古代の条里の水源は、経塚山、熊野社の存在を考えると、黒土甲川と軸丸川と考えられる。下井路は、黒土甲川の水は、宮田の付近の水門で合流し、軸丸川の水は深町水門で合流する。井上条里の地割の方向は、井上条里へ水を送る下自在の下井路とその方向は一致する。さらに、この下自在の下井路の水路の方向は、圃場整備以前の条里的地割と見られる上自在の水田の方位と一致している。この事実から、上自在、下自在の地区にも古代の地割の残像が明らかに見られ、私が推測した古代の井上条里への水の供給源は、黒土甲川と軸丸川であったことを裏付けることができる。

写真２　熊野社の仏像

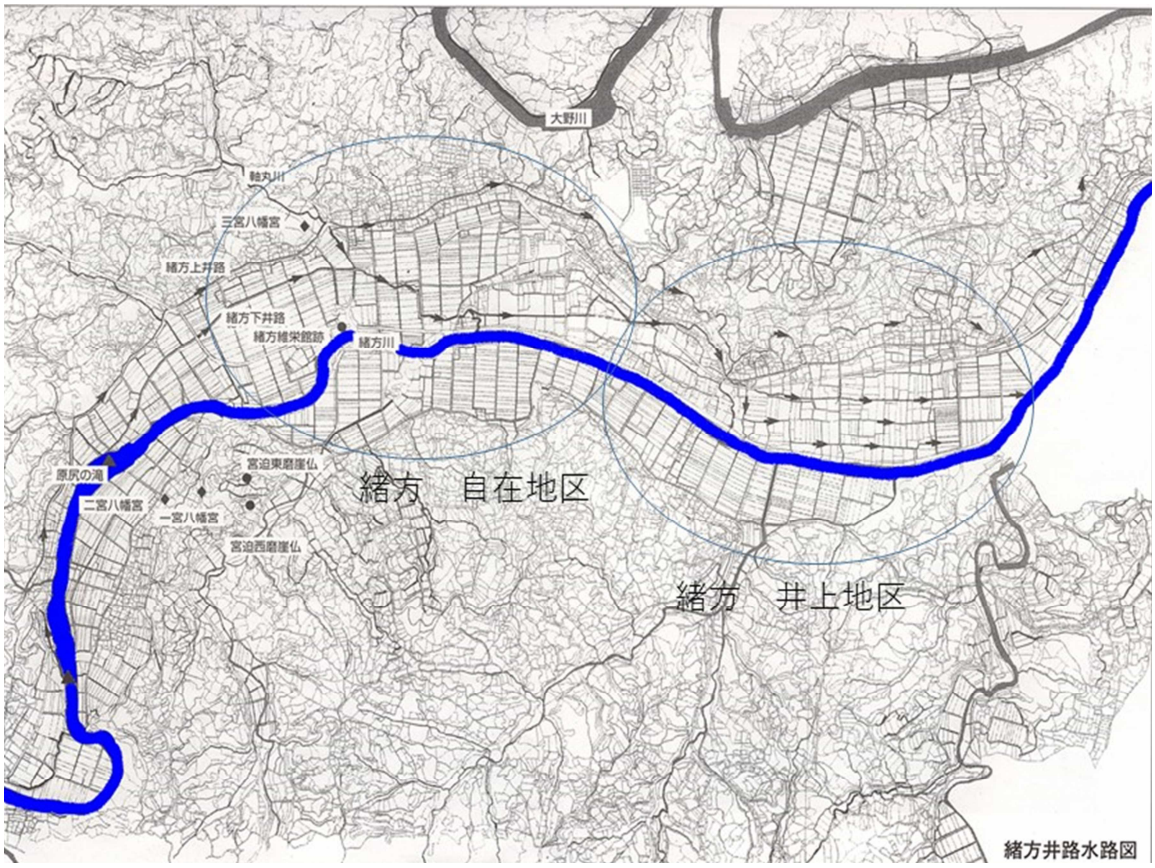

図２　上・下自在地区と井上地区の地割りと水利

圃場整備以前の緒方盆地の航空写真

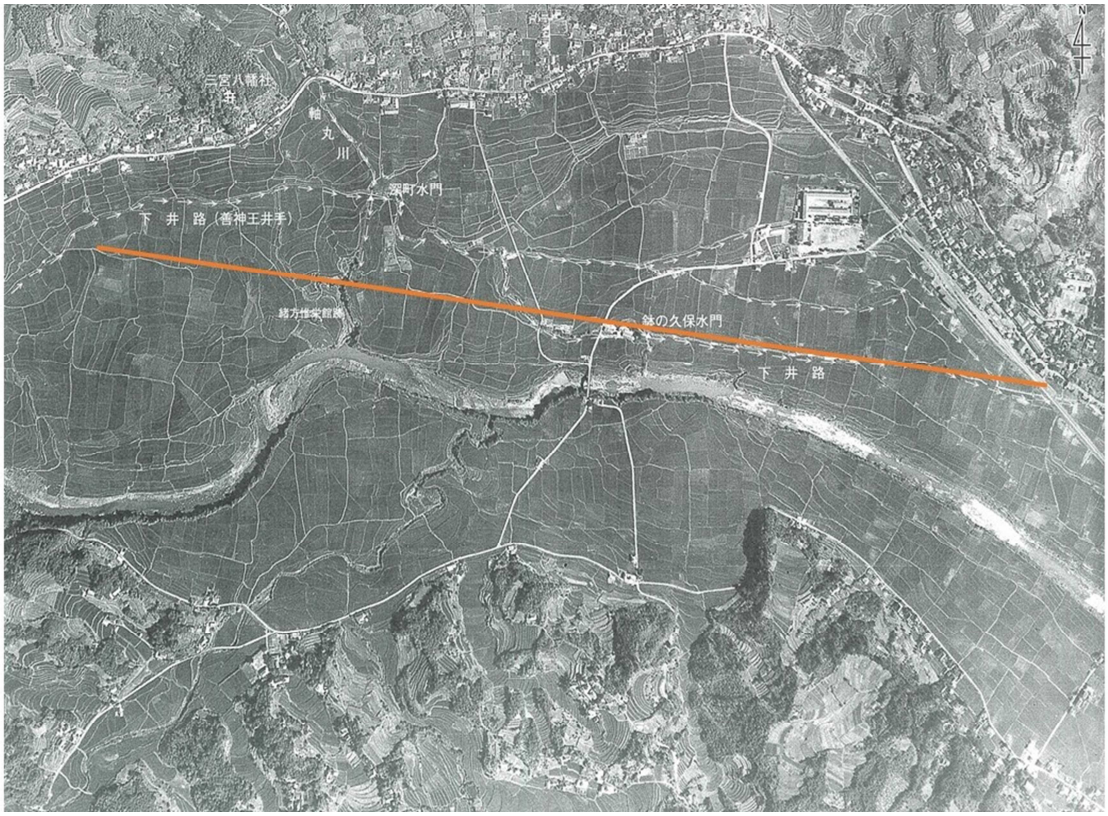

写真３　上・下自在の地割りと下井路の方向

第３節　中世　　緒方三郎惟栄と川越し祭

1　緒方惟栄の盛衰

緒方の伝承によれば、緒方一宮八幡、二宮八幡、三宮八幡は、源平の内乱期の英雄緒方惟栄によって創建されたといわれる。惟栄の館といわれる場所は、三宮の南に位置し、軸丸川の水と下井路の水が合流する深町水門のすぐ南にあった。すでに前節で述べたように、古代の井上条里地区へ供給される主な水は、軸丸の山塊から流れ出した軸丸川や黒土甲川の水が利用されたと考えられる。緒方惟栄の館がこの三宮近接地で、深町水門の付近に置かれたことは緒方盆地の水利支配の第一歩であったと考えられる。

緒方惟栄は、緒方荘の庄司としてはじめは平重盛の家人になっていたが、領家である宇佐宮と対立し、治承４年（1180）の源頼朝挙兵以後、反平家として活動する。一族の臼杵氏、佐賀氏、姻戚関係にある日田氏などと連携し、九州に落ちた平家の主力を大宰府や宇佐宮に攻撃したり、平家攻撃ために九州に渡ろうとした源氏の軍に兵船を提供するなど反平家勢力として奮戦した。しかし、のち後白河法皇や源義経に接近し、頼朝と対立した義経の西国下りを幇助し、豊後の武士（緒方一族）は船を用意し、摂津国大物浜（兵庫県尼崎市）から九州に下向する計画であった。しかし、義経の一行の船は大風で難破し、結局、逃亡の地を平泉に変更することになった。義経を招くための城が岡城であったという伝承がある。しかし、鎌倉政権は、緒方惟栄が自分の所領に義経を招いた計画の確かな証拠は握っていなかったため、宇佐八幡宮の乱入の罪を口実に緒方一族の所領を没収し、惟栄は、上野国沼田の地に流刑とされた。

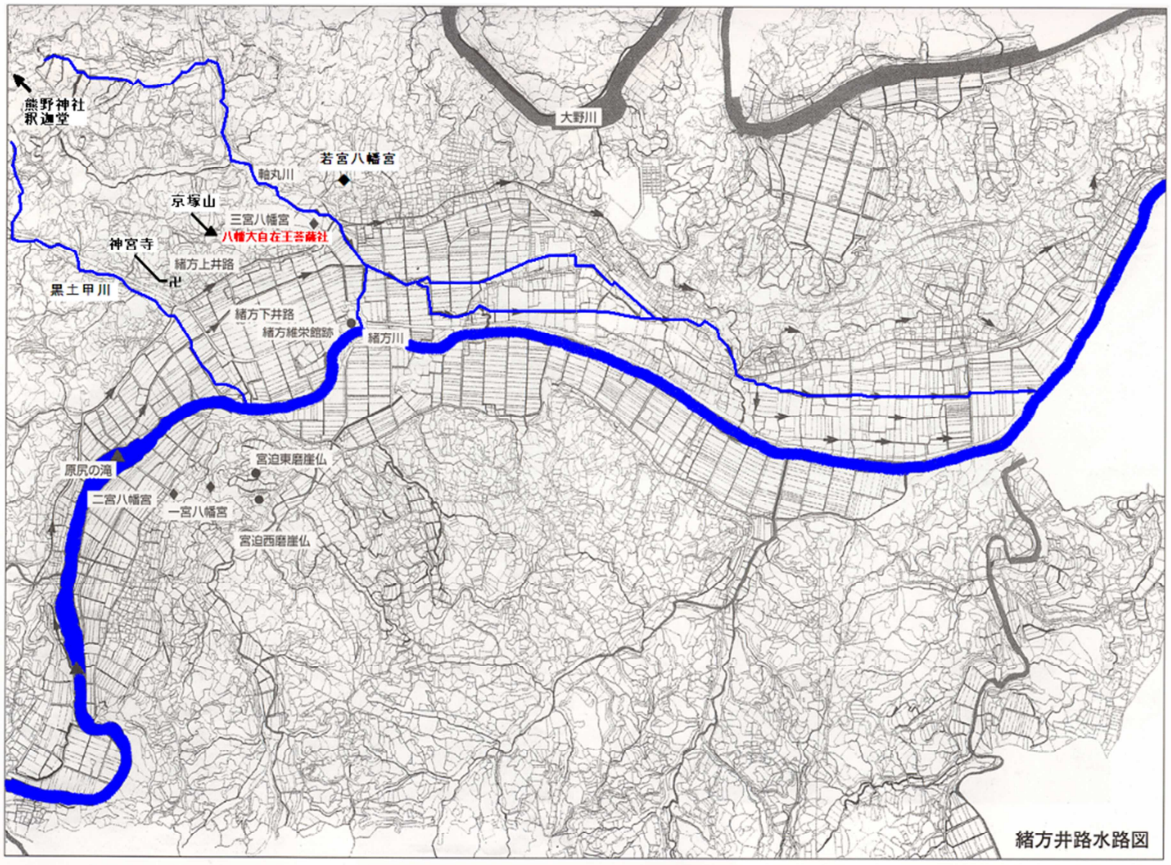

図１　古代における緒方の水利灌漑

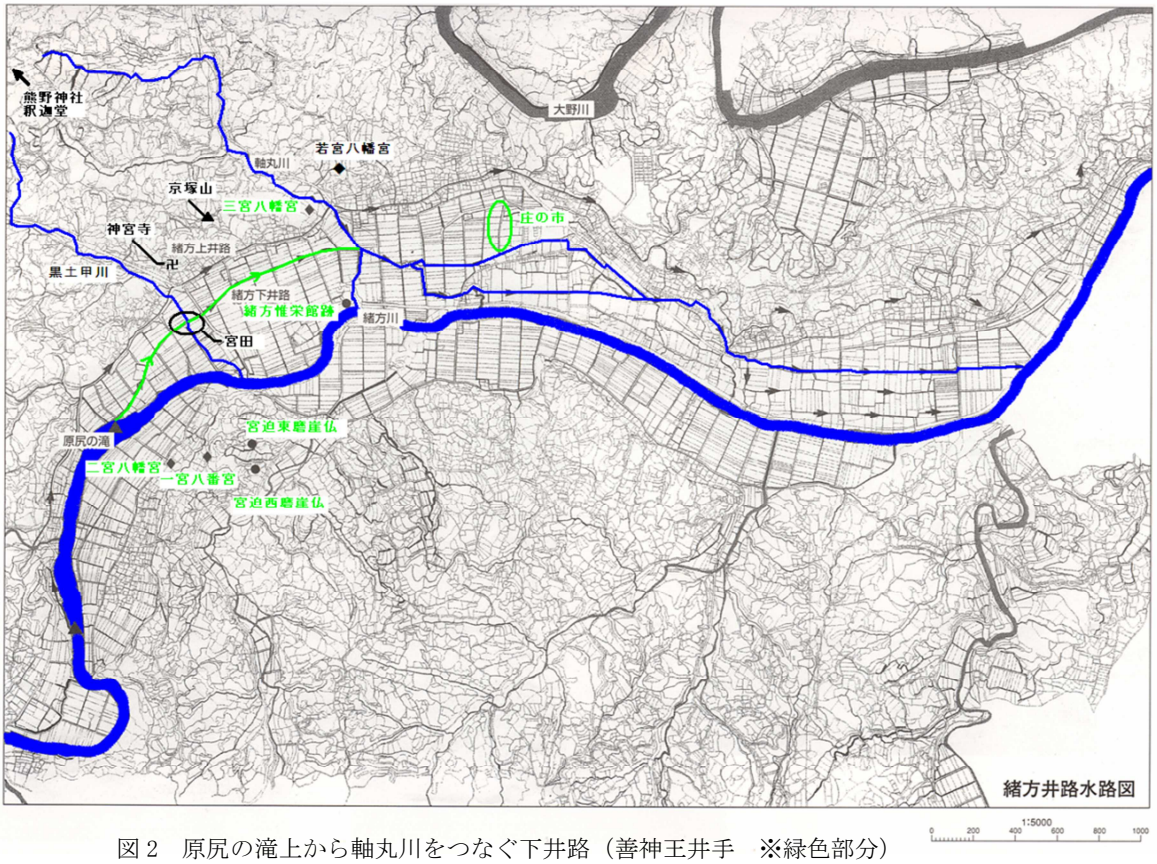

図２　原尻の滝上から軸丸川をつなぐ下井路（善神王井手　※緑色部分）

緒方三社八幡宮は、治承 2 年（1178）に建立したとされる。伝説では、惟栄が現在の緒方町宮尾にある元宮から 3 本の矢を射て、1 本目が落ちたところに一宮社、2 本目が落ちたところに二宮社、3 本目が落ちたところに三宮社を、それぞれ建てたとされる。三社の建立は領家である宇佐宮との決別を意味した。惟栄は原尻の滝の上に取水口を造り、下井路（善神王井手）を築いたと考えられる。これによって、それまでの条里井上地区へ向かう下井路の主水源を緒方川本流に移したのである。それを契機に原尻の滝の横に滝の守護神として二宮建設が計画され、二宮の上に一宮が計画されたと考えられる。一宮の下の宮迫には、12 世紀末に造立されたと推定される宮迫東西磨崖仏があり、これは一宮の建立と対応していたと考えられるのである。宮迫の両磨崖仏の下には「イノコ」（湧水点）があり、ここは祖母山（姥が嶽）の尾根が緒方盆地に張り出した先端に位置する。

緒方惟栄は、すでに紹介したように、『平家物語』では、姥が嶽の洞窟に棲む大蛇の末裔であったと語られる。大蛇は山の神であり、三輪山の神と同根であり、水神であった。彼はその末裔であり、水の支配者として、その正当性を示すために緒方三社の創建を行った。緒方惟栄の手によって、宇佐宮の支配拠点であった自在の八幡大自在王菩薩社は三宮に再編され、緒方氏の水利支配は確固たるものになったのである。

２　緒方川越し祭りを読む

毎年 11 月半ば～11 月末の土・日に緒方三社の祭礼である緒方川越し祭りが開かれる。緒形三社はいずれも 1178 年に緒方惟栄が創建したといわれている。緒方惟栄が宇佐神宮を焼き討ちした際に、流れ矢が膝に刺さり、これを神罰として宇佐神宮を勧請し宮尾の地に元宮を設け、この地より、惟栄が弓に 3 本の矢をつがえ一度に放ったところ、その矢が久土知宮園、原尻、上自在の地に落ちた。現在の一宮社、二宮社、三宮社はその地に建てられたという言い伝えがある。

写真１　取水口の水路に入る神輿

また、原尻の滝で洪水や暴風雨が相次ぎ、不安に思った大友能直は原尻の二宮社に緒方惟栄と大野泰基の霊を祭ったという。この二人の霊を鎮めるために川越し祭りのはじまりとも伝えられている。三社の祭神は、それぞれ一宮は仲哀天皇霊、二宮は応神天皇霊、三宮神功皇后霊が祀られている。祭礼は三宮の神輿が上井路沿いの道を進み、宮田（上自在と原尻の境）に向かい、そこから下井路沿いを原尻の滝の取水口に向かい、神輿は取り入れ口の水路に神輿を入れ、練り廻り、その後滝上の鳥居を通り、御旅所を通り、二宮参道を登り、二宮に入る。一宮の神輿は山から下り、二宮に入り、二つの神輿は、二宮神殿の前で出会う。その後、両神輿は二宮拝殿に入る。祭礼の時間経過を概ね以下に記載する。

17：00 頃　　・三宮社では氏子が集合し、準備が行われる。
　　・階段には滑り止めのために、砂を撒く。

17：25 頃　　・三宮社で神事開始。
18：00 頃　　・三宮社では神輿が本殿を出発。

　　・二宮社ではカワ組が原尻の滝に集合。
18：25 頃　　・三宮社の神輿が宮田に到着。
　　・一宮社では神事。神輿遷座。
18：30 頃　　**・宮田での神事が始まる。**
　　・オカ組(18 人程)は服を脱ぎ、二宮社からの担ぎ手が来るまで待機。
18：45 頃　　・二宮社からの担ぎ手(18 人程)が宮田に到着。
18：50 頃　　・三宮社の神輿を二宮社の担ぎ手と一緒に持ち、宮田を出発。
　　・一宮ではお神酒が配られ、総代の挨拶などが行われている。
18：55 頃　　・一宮社の神輿が二宮社へ向けて出発する。
19：05 頃　　・三宮社の神輿が原尻の滝上流に到着し、川の中へ。
　　・一度、下井路の取入口に行き、一周。滝の上にある鳥居に向かう。
　　・一宮社の神輿は、二宮社に到着。
19：25 頃　　・三宮社の神輿が二宮社に到着。
19：30 頃　　・一宮社の神輿と合流。
　　・二つの神輿の担ぎ棒の先端を接触させる。(出会いの儀式)
　　・その後は拝殿にあがり、御霊移しが行われる。
19：45 頃　　・神楽がはじまり、50 分頃には一日目が終了する。

写真 2　宮田での神事

この祭礼は、一年に一度、一宮の父仲哀天皇霊と三宮の母神功皇后霊が二宮の子の応神天皇霊に遭いに行く祭礼といわれている。一方で、緒方惟栄が勧請した三社とすれば、『平家物語』にある緒方氏の始祖神姥が嶽の大蛇との関係が注目される。また、大友能直が緒方惟栄と大野泰基の霊を恐れ、川越祭りが始まったという。建久 7 年の大友能直の入部に抵抗し、大野荘神角寺で自刃した大野泰基は、怨霊となり、豊後国内に災害をもたらした。大友氏は、この霊を鎮めるために、国内に御霊社を建設するが、緒方の二宮の川越し祭りもこのとき始まったという説である。水にかかわる祭りが御霊と結びつくことはよくある。一宮は祖母山の地下水を意識した神、二宮は緒方川・滝の神、三宮は軸丸川の水の神とする見方もある。下井路の取り入れ口での三宮の神輿の動きをみると、水路に関わる祭礼であることは間違いない。

この祭礼は、三宮の神輿を宮田で一度休ませ、そこで神事を行い、ここから、三宮の神輿を三宮のかき手と二宮のかき手が合流し、滝まで担いで行く。そこで、下井路の取水口近くの水路に入り、神輿を回す。そこから、滝の上の二宮の大鳥居を通り、川の渡り、二宮に入る。この三宮の神輿の動きは、軸丸川の水の象徴三宮の神輿が黒土甲川の出口にある宮田で休憩し、その後、

二宮のかき手が神輿を担ぐことで、滝からの水を合わせることを示していると見られる。前節で述べたように、下井路の滝から宮田の間は、一宮、二宮、三宮の成立の際に、この滝から宮田の区間の水路は開削されたと考えられる。水路の開削時期は、緒方惟栄の時代から大友能直の時代、12 世紀の後半から末期の時代と考えてよいだろう。この水路の開発は、滝からの安定した水量を確保することになり、中世の大友氏の緒方支配の基礎はここに固まったといえる。

第４節　近世　　緒方盆地における新井路の開鑿と緒方五千石

１　緒方盆地における新井路の開鑿

緒方盆地の水田は、緒方川の本流から取水しているが、取水点は原尻の滝より上流にある。緒方川の左岸の水路としては、大字辻の蜘蛛ん迫（蜘蛛が迫）で取水し、盆地の東の端である野尻集落を経て、桑鶴平で緒方川に排水する緒方上井路と、原尻の滝の上で取水し、盆地の東端西白寺を経て佐田付に至る緒方下井路（地元では中井路・中井手、さらに古くは善神王井手）がある。緒方川右岸の水路としては、上年野の長瀬で取水し、上戸を経て、二宮八幡社の前を通り、市穴で野中井路と合流し、野仲、知田方面に至る原尻上井路（古井路ともいう）、原尻の上戸で取水し、市穴で原尻上井路と合流し、野仲、知田方面に至る原尻下井路（野仲井路・中井路ともいう）がある。

写真１　原尻上井路（古井路）の取水口

緒方盆地の現在の水利体系の構築は、そのほとんどが 17 世紀の半ばから後半に岡藩中川氏の下で進められた。岡藩は、豊臣政権以来の藩であり、豊後最大の藩である。しかし、山間地所領が多く、米が生産出来る穀倉地帯は少なかった。緒方盆地は、岡藩最大の穀倉地帯であり、この盆地開発に岡藩は心血を注いだ。最初は、原尻上井路が新田開発のために正保２年（1642）に開鑿されたが、まもなく廃絶し、元禄８年（1695）に再興されたという（「中川家御代々覚書」「地方温故集」「豊岡古談」）。次ぎに、原尻下井路は、承応元年（1652）に造られ、原尻上井路の水を市穴で合わせて知田まで通水したという説（「中川家御代々覚書」）と承応３年（1654）に出来たとする（「地方温故集」）説がある。

緒方上井路は、『緒方村誌』によれば、「既設の原尻井手に接続して、新渠を開鑿せしめ」たとある。原尻下井路と緒方上井路の堰は同じ場所にあり、同じ堰を利用して反対側に緒方上井路の取水口を造ったということであろうか。

写真２　緒方上井路の取水口付近

緒方上井路は、寛文元年（1661）に竣工し（「御

覧帳細注」)、寛文 2 年（1662）に井手を造り馬場村の柏木まで通水し、打越村に水をかけた（この井手を木原井手のちに越生上井手）という（「中川家御代々覚書」「地方温故集」「豊岡古談」)。これにより、上自在、下自在、馬場、井上の地区では、上井路と下井路の間の斜面にあった畑、屋敷が水田化され、これによって屋敷の移動が起こったことが江戸時代史料や斜面の屋敷や畑の地名から推測される（『緒方町誌』総論編)。その後、寛文 11 年（1671）には、本線は馬場から桑鶴平まで延びたといわれる。岡藩 3 代目中川久清のとき招かれ、1660 年に岡藩を訪れていた熊沢蕃山は寛文元年（1661）の城原井路を計画し、緒方上井路の計画にも関係したという説がある。

緒方上井路の取水から 200ｍほど下流には山を掘り抜いた水路トンネルがある。このトンネルを抜けた場所には地獄水門と呼ばれる大きな水門がある。上流から流れる谷川の水と上井路の水を合わせた水門で、この横には「石割碑」と呼ばれる石碑が建っている。

この碑文から見ると、すでに述べたように、緒方上井路は、寛文 2 年（1662）に工事が始まり、馬場より下は、寛文 11 年（1671）に開削されたことが記されている。現在の地獄水門に至る水路トンネルは、天和 3 年（1683）に掘り抜かれ、184 年間通水したが、トンネル部分は毎年破損し、人々はそれに苦しんだ。そこで、藩主中川家に許可を得て、地元の数千人を動員し、弘化 2 年（1845）3 月に掘り替えを行った。この石割碑はそのときに造られた碑である。碑文は四面にあり、正面に趣旨の碑銘を刻み、中川家の役人、石割の大工、関係した村・組（上自在村、原尻村、軸丸組、年野組、井上組、今山組）とその関係者の名を記している。また、願王尊一駆とは、取水口近くにある磨崖像を指すと考えられる。井路は、天和 3 年のトンネル通水までの最初の段階は蜘蛛ん迫（蜘蛛が迫）の取水口から川に近い旧道側を通した可能性がある。この旧道にも当初の願王尊と思われる石造が路傍に残っている。この幕末の水路改修によって、上井路は今につながる最終的姿となったのである。

写真 3　地獄水門の石割碑

２　緒方井路碑に見る緒方五千石の出現

緒方三宮の太鼓橋を渡った右手に明治 34 年 4 月に建立された「緒方井路碑」が建っている。碑の表面は、苔むし欠損し、判読が不明な部分があるが、裏面には、緒方村（上自在地区・下自在地区・馬場地区・井上地区・野尻地区・越生地区)、南緒方村（原尻地区）の地主が資金を出し、建立したことが記されている。碑文には、岡藩の中川氏入部以降、緒方の 2 渠（水路）が整備されたことが記される。碑文の概要をまとめると、次のようになる。

緒方村は、大野郡の西部にあり、2 つの大河（大野川と緒方川）が回っている。南北は狭く、東西は長い。昔は、民家は原野の中に散在し、軸丸、小富士村より流れる渓流があるが、水に乏しく良田は少なかった。我が岡藩が封ぜられたとき、民家を移し、原野を開き、石を積み重ね橋を架け、岩を穿ちて山に隧道を通し、姥が嶽より流れる緒方川の水を引き、2 つの渠（水路）を通水させた。

1 つは、下渠（下井路）と上渠（上井路）であり、合わせて緒方渠といい、封内第一の大渠（大

水路）であった。下渠は、当時南緒方村に属していた原尻の滝上から取水し、緒方村の上自在、下自在、馬場、井上、野尻の南部まで灌漑した。下渠の水路の長さは2里1町余（7,969m）、そのかかりの田は144町2反余、寛永8年（1631）から中川内膳正久盛の経営で工事を始めたという。上渠は、寛文2年（1662）に竣工し、小富士村浄土淵より南緒方村原尻及び、緒方村上自在下自在馬場ノ柏木に灌漑し、さらに越生の原口を潤した。この延長は2里12町餘（9,168m）であった。その翌年、柏木より分派し井上、野尻の中央に敷き定付に至る。この延長は、1里19町餘（6,001m）、浄土淵より定付までの全長は3里1町餘（12,079m）であった。その灌漑田数は1,135町余であり、完成は寛文11年（1671）であった。これらの経営は、中川山城守久清であった。

二渠（上井路と下井路）の灌漑する所の田を合算すれば、279町7反餘である。ここに緒方盆地の田圃は碁盤の石のように点々として、集落はまばらであったが、それが10倍にもなった。米は遂に「緒方米」の名称を得るに至った所以は誰の御かげであろうか。200余年の歳月が流れ、年々戸数は増加し、月毎に人口は増え、旱魃があっても食料の穀類が確保できるようになり、人々の益となっている。そこで緒方村、南緒方村の原尻の人が衆議して、その功績を記念し碑文を建立した。

写真4　下自在の上井路

この碑文には、緒方五千石と呼ばれる穀倉地帯を形成した下井路と上井路の歴史が記されているが、下井路は寛永8年に中川久盛のときに工事が行われたことが記される。しかし、原尻の滝から取水する下井路の開発は12世紀後半に遡ることは間違いない。このことは、筆者がすでに緒方庄司の緒方惟栄がこの滝から水路の開発に関係したことを明らかにしている。おそらく、寛文8年の下井路の竣工は、水路の大改修であろう。中世までの幅の狭かった水路を大改修し、水不足を解消し、さらに水量を確保できるようにしたと考えられる。そして、17世紀後半の緒方川に南岸の原尻井路、野仲井路の開削、北側の緒方上井路の開削によって、散居村的景観を有していた緒方盆地の集落は、水路沿いに集落が並ぶ、今日的な集落景観を出現させることになったと考えられる。

これら緒方川の北の平地と南の平地における17世紀前半、半ばから後半の長距離井路の開削、改修などの開発によって、その後「緒方五千石」と呼ばれる岡藩最大の穀倉地帯が生まれ幕末には、藩主の「御覧田植え」が行われたのである。

藩主の御覧田植えは、安政4年（1857）に上自在村、井上村、安政5年（1858）に玉来、安政6年（1859）に下自在村、馬場村、安政7年（1860）に原尻村と連続で4回実施されている。その内3回は、緒方盆地、いわゆる「緒方五千石」の穀倉地帯で実施されたことは象徴的な出来事であった。

旧軸丸組大庄屋高野家所蔵の「下自在村・馬場村　若殿様御覧田植萬覚」によれば、5月13日に当時10歳の藩主久成が田植え見物をしたいとして、下自在村、馬場村に命が下った。見物の予定は25日になっており、地元では慌ただしく準備を始めた。平素の田植えと異なり、見せるための田植えを演出する必要があった。記録では「若君様御幼君に付き御退屈遊ばされ候御儀も御座

有るべきに付き、早仕舞に相成候」とあるように、幼い藩主に合わせて田植えが進められた。藩の役人との何度かの打ち合わせ、見物の「御仮屋」、食事の準備などは村々の負担で進められ、田植えは、下自在、馬場のみならず、軸丸組はもちろん他の周辺4組の田植えに優れた人がかき集められた。結果的に821人が動員される大イベントとなったのである。

21日の当日は、田植えをする人々に以下の注意事項（現代語訳）が示された。

①笠は許しがあるまでは勝手にかぶらないこと。

②藩主が来られたときは、屈んで、植え目を見合い一斉に取り掛かること。

③苗は遠くに投げないようにして、丁寧に扱うようにすること。

④喧嘩・口論は決してしないこと。

⑤無礼・無作法の様はないようにすること。

細かすぎるほどの注意が示された。当日は雨が降っていたが、藩主と役人42名が田植えを見学し、久成は「益々御機嫌よく」帰城し、御覧田植えは無事終了したのである（高野家文書、『緒方町誌』総論編ｐ372－373）。緒方盆地での相次ぐ御覧田植えは、地元民には大きな負担ではあったが、この地域が藩にとってどれだけ重要な場所であるかということを地元民にも自負させる出来事であった。

岡藩では、村高に対して、〇ツ台というかたちで年貢率が定められた。例えば、七ツ台は石高の7割の年貢を納入することで、十成とは石高十割を納入することを意味した。十成は、領内で九か村あったが、これら村では、十割取られても、余剰があるほど生産性が高い場所と推察される。緒方盆地の緒方下井路、上井路の水系にある村では、岡藩の年貢十成（十割）の村が下自在、井上、野尻の3箇村が含まれていた。このことは、この地域の生産性の高さを端的に示すものであった。

第５節　近代　　長距離水路と石橋

１　緒方盆地の水と酒

緒方川流域に広がる緒方盆地は、江戸時代では岡藩の主要な稲作地域で、藩主が視察する御覧田植が行われていた。すでに述べたように、緒方平野を灌漑するために大規模な井路（灌漑用水路）の開鑿が行われた結果である。代表的なものには、「緒方上井路」、「緒方下井路」がある。明治4年の廃藩置県以後は、緒方井路の管理は各村々に移された。明治14年緒方上井路関係各村（原尻・上自在・下自在・馬場・越生・井上・野尻）では、「上自在井路水利組合規約書」を取り交わし、井路の管理・補修規定を定めた。これによって、「井路修繕世話係」を各村から5名選出し、修繕か所を調査し、修繕工事を行った。井路の修繕は4月上旬に始められ、5月上旬には終了し、12月には井路集会を開くことが決められた。また、井路に設置されている水車の利用者から利用料を徴取し、補修料に充てることも決められた。

このように、水に恵まれている地域があった一方で2軒の酒屋がある下自在地区は、水路はあっても飲料水に恵まれない地域であった。特に良質な水を多量に必要とする酒屋においては大変な苦労があり、昭和3年（1927）　に吉良文六、浜嶋富家両氏の発案により、集落の人々に諮って

軸丸轟水源より軸丸入口高石垣に貯水タンクを作って用水道を造成した。これが、緒方町で最初の水道施設である(金毘羅水道)。

緒方町には当初5軒の酒造があったが、現在では2軒に減っている（戦時中にはそんなことをしていられないという事もあり酒造りをやめる酒造も多かったという)。現在残っているのは「鷹来屋（浜嶋酒造)」「吉良酒造」の2軒で、どちらとも日本酒を主に造っている。酒はその土地で良くとれる産物から造られる。例えば、小麦→ビール、ぶどう→ワイン、さとうきび→ラム酒であり、日本では米が一番よくとれるため、「米」→「日本酒」となる。緒方盆地は豊かな米どころであり、豊富な地下水もあるため、日本酒製造を行う条件が整っている。

鷹来屋は、明治22年（1889)に創業され、現在は5代目となる。初代は浜嶋百太郎という人物で、創業の背景には、米を作る土地と水を持っていた事が挙げられる。戦時中も酒の製造を続けており、歴史は127年となる。昭和54年（1979）に委託醸造となったが、平成9年（1997）に復活し、平成18年（2006）には酒米の栽培を開始した。

鷹来屋は、元々いくつかの水源をもっており、大きな水源も有し(金毘羅水道)地域の人々にも提供できるほどであった。現在は、蔵の裏に地下60mから汲み上げた水を使用している。酒米は、緒方盆地産を主に使用し、地元産の米で地酒を作ることにこだわりを持っている。現在、9haの水田を管理している。

写真1　鷹来屋（浜嶋酒造）

酒は神聖なものとされた為、神事や信仰等と強い結びつきがある。祭りや、地域の冠婚葬祭の際等には欠かすことが出来ないものであり、人々の生活と強い結びつきがある。酒には人の心を癒す力があり、悲しい時も酒、楽しい時も酒という考えがあり、地域の人々の生活と共に酒が存在していた。近年では、食生活の欧米化にともない、人々の酒の好みも変化しており、その変化に合わせた酒造りを行っているという。鷹来屋は、食に寄り添う酒造りを行い、現在は20種類ぐらいある。その中でも、食中酒は、食べ物の脇役に入っていくような酒がよいという考えから、出しゃばりすぎない食べ物ありきの酒造りが理想であるとして、様々な工夫をしている。

吉良酒造は、明治4年(1871)に創業し、現在の当主は5代目で、その息子が6代目となることが決定している。元々は庄屋の分家であり、緒方や近隣地域にも田を所有し、・豊富な水源を持っていたことが、酒造業を始めた背景にある。戦時中、酒製造は中止し、軍需工場になっていたようで、戦後に再度酒造りを始めた。

写真2　吉良酒造

水源は蔵の横にあるが、軸丸の道沿いにも井戸がある。水量が豊富で、質が良い地元の水を使用している。酒米は、元々は自前で賄っていたが、昭和の末にやめていた。しかし、緒方の米を中心に、豊後大野産の米を契約農家から仕入れるようにし、酒造りに適した地元産の良い酒米を使うようにした。酒造りは、地元の生活・風習と共に歩んできたものであり、出荷の多くは地元に向けたものであった。昭和中期ご

ろまでは、下自在地区が緒方の中でも繁華街であり、お酒の出荷量もピークに達していた。質よりも量を消費するような時代だった。 酒は、人々の生活との関係が深く、地域のお祭りや冠婚葬祭の時などに欠かせない存在であった。しかし、焼酎ブームや人口減少、好みの多様化等で日本酒の消費量が下降したため、昔ながらの酒造りに戻し、量より質の酒造りへと転換した。また、時代に応じて酒質を変化させてきており、近年では、女性や酒に弱い人をターゲットにした「ゆすら桃」等を開発し、人々の生活スタイルや好みの変化などに合わせた酒造りを行っている。

緒方の酒屋は、2 軒とも製造する酒質や歴史も異なるが、地元産を使用するという共通したこだわりがある。「緒方町は、日本酒製造に適している」、「地元の米と水を使った酒であるからこそ地酒であり、地元とともにやっていく」という意識が共通しており、「緒方だからこそ作れる酒」というものを目指している。

昔から酒は人々の生活に欠かせないもので、「悲しい時も酒、楽しい時も酒」というほど、人々と酒は強く結びついている。2 軒の造り酒屋は、時代の流れと共に、製造方法や味など形を変えながらその時のニーズに合うものを製造している。その土地の酒米生産者や酒を購入する客との間の信頼関係の構築や、地元への貢献に対するこだわりを、2 軒の造り酒屋からは強く感じた。

また緒方産の酒は、人々の食に寄り添うだけでなく、その土地の祭礼の際に奉納物にもされている。酒は、神々と人々を繋ぐ一つの手段としても考えられるのではないか。

2　近代の長距離水路と山間部の棚田開発

明治末から大正期に建設された富士緒井路や明正井路によって、緒方地方の盆地周辺部の山間部の開発が進む。

富士緒井路は、竹田市と豊後大野市緒方町草深野、軸丸地区の丘陵部を潤している。名称の由来は、井路の開削計画があった大野郡小富士村の「富士」と、大野郡緒方村の「緒」の文字をとって命名された。大野川上流部の竹田市より取水し、豊後大野市緒方町まで総延長 15 ㎞の幹線水路を経て、最終的には受益地小富士地区、緒方軸丸地区に配水している。山間地域を通っているため幹線水路総延長 15 ㎞のうち、隧道区間が 70 か所、延長にして 10.5 ㎞に及ぶ水路となってい

図 1　富士緒井路水路図（「富士緒地区事業概要」より）

る。井路が通る隧道は、一部素掘りの状態で残っている区間もある。水路には、第一発電所、第二発電所の２ヶ所の発電所が設けられた。大正３年（1924）水路通水とともに第一発電所は発電を開始する。電気そのものがあまり普及していなかった当時、井路より標高の高い台地に電動ポンプで揚水し開田を進めるためのものであった。

富士緒井路開削の起源は慶応３年（1867）にさかのぼる。軸丸等この井路の水の恵みを得る地区は古来より水利に恵まれず、山の斜面は、畑地となっており、水田は谷間に散在し、天水と少量の湧き水（イノコ）に依存してきた。しかし、この年の大旱魃が契機となり、当時軸丸村の後藤鹿太郎が灌漑井路整備を発起し、自身で工夫した方法で測量・踏査を始めたのが井路開発の発端である。明治44年(1911)10月になりようやく工事に着手されることとなった。大正３年(1914)に井路が末端まで完成し通水、その後水不足対策・水力確保のための工事が行われた。

富士緒井路で最も文化遺産として評価が高い施設としては、「白水溜池堰堤（白水ダム）」がある。渇水時の水不足を解消するために大野川上流に昭和13年（1938）に築造され、堰堤の形状や流水の美しさから「日本一美しいダム」と称され、平成11年（1999）には、国の重要文化財に指定されている（『富士緒井路水利史』）。

一方、緒方地域の南部の山間部を潤すもう一つの近代長距離井路に明正井路がある。この井路は、緒方川及び支流神原川の水を竹田市次倉・門田で取水し、豊後大野市の旧緒方町と旧清川村を灌漑する水路であり、導水路幹線の延長約48㎞、分岐している用排水路延長約127ｋｍ、包容面積約2,323ha、うち開田面積402haに及ぶ大規模なものである。

名称の由来は明治から大正にかけ、一連の計画と工事が行われたことにちなみ命名されている。明正井路は、緒方川のかなり上流から引水しているため、起伏に富んだ地形を通水しなければならなかった。そのため、山は素掘り隧道で掘り進み、谷は水路橋を架けて越える必要があった。中でも水路橋の数は実に17橋を数え、これほど多数の石橋を用いた大規模な灌漑施設は全国的に

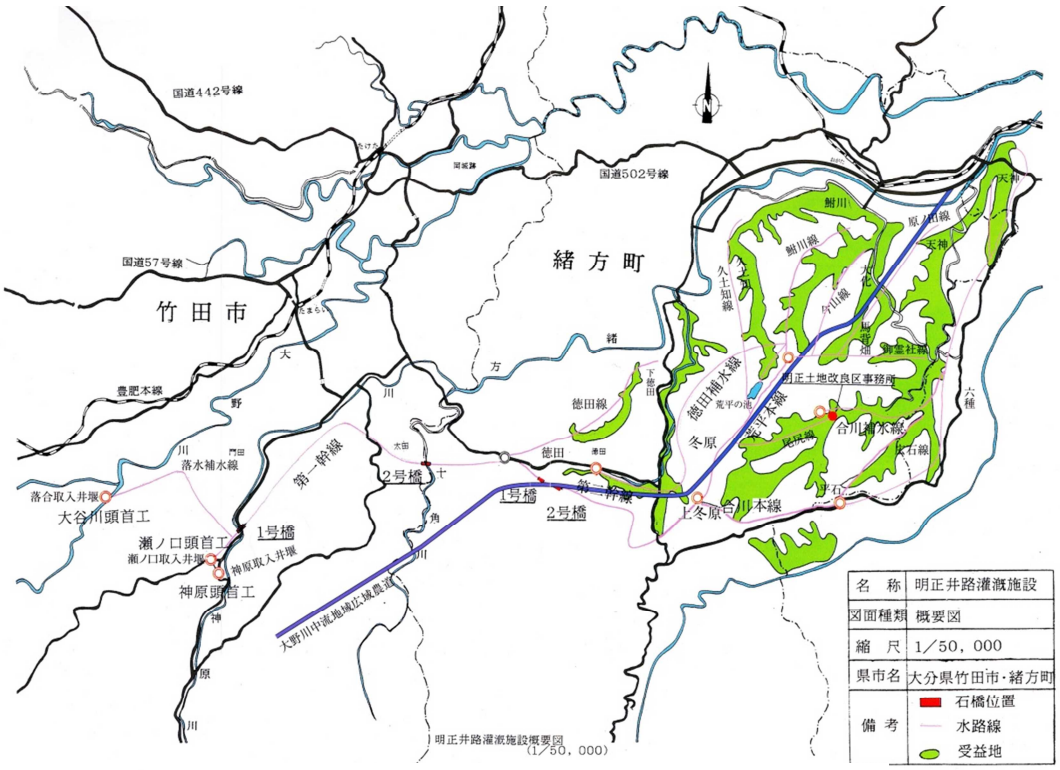

図２　明正井路の水路図（『明正土地改良史』より）

みても極めてめずらしいものであった。

水路開削の背景は、文久年間（1861～1864）当時、岡藩領地であった上緒方・南緒方・合川・牧口地域の一帯は水利条件に恵まれず、耕地もわずかであったため住民は困窮していたことにある。岡藩により水利開墾事業が計画されたが、藩の財政難で挫折、その後、幕末の混乱や財政難で計画は頓挫した。明治 42 年（1909）に耕地整理法改正公布により補助事業が認可されると、開削と開墾のための調査が実施されることとなった。設計と施工は当時県の農業技師であった矢島義一氏により行われ、大正 6 年（1917）に起工し、途中休止・再開を繰り返しながらも大正 13 年（1924）に完成している。石橋の中で「明正井路第一幹線 1 号橋」は、国内で現存する最大規模の水路用石造アーチ橋であり、貴重な文化遺産として土木学会により「土木遺産」に認定されている。

まず、棚田や水路は、もともとの狭い土地を活用しようと、当時の人々が試行錯誤した結果できあがったものであるといえる。棚田も井路も、全国的に一定の評価を受け、知られる存在である。井路は棚田の景観を形作る要素でもあり、緒方に見られる石を多用した文化や水の利用がうかがえ、富士緒井路は完成から約 100 年､明正井路は約 90 年経ってなお現在も地域の農業の基幹水路として利用がされ、同時期に形成された棚田もまた現在に至って残されている。緒方盆地の中ではないが、白水溜池堰堤（白水ダム）や明正井路第一幹線 1 号橋など、築造当初の形状がそのままに利用されている施設も現存している。

写真 3　明正井路第一幹線 1 号橋

３　近代の石橋建設と交通

緒方における橋（石橋）の用途は、その基本は川を渡るためのものである。しかし、その渡る主体が実は異なるため、用途としては 2 つある。一つは人や動物や車が渡るためのものである。もう一つは古代ローマの水道に見られるガール水道橋のごとき水路橋、すなわち水が渡る橋である。日本では、嘉永 5 年～7 年（1852～54）に造られた熊本県山都町の通潤橋（国指定）は最も有名な水路橋である。

江戸時代、長崎を入口に石橋の技術は日本入り、熊本を経て、19 世紀には大分に入った。これが近代以降大分県で展開し、多くの石橋が造られ、大分県は日本一の石橋県となった。表 1 によれば、江戸時代にも神社の太鼓橋はあるが、いわゆるアーチ石橋は明治 10 年代以降に造られて行く。人など川を渡るための橋の架設は大正の末年にピークを迎える。大正 11 年に豊肥線鉄道開通、緒方駅が開業する。当時の緒方の村境にかかる巨大石橋のうち 13 の架設年は大正 11～13 年であり、この豊肥線鉄道開通に伴う道路交通網の整備のよるものであることは明瞭である。石橋は阿蘇火砕流の溶結凝灰岩の石を使った水害に強い頑強な橋であり、鉄道の開通にともない、物資や人を村から鉄道の駅に運ぶために建設が進んだとみられる。

また、緒方川は原尻の滝を境に深い谷の形状になる（溶結凝灰岩の侵食・柱状節理の崩落）。これにより原尻の滝より下流では緒方川からの農業用水取水が出来ず、緒方上井路・下井路が成立し、平野部の水田を潤している。これらの水路を渡る小型の石橋も多い（表 1）。

表１ （『おおいたの石橋』より集計・引用）

架設時期	数	
江戸期	1	二宮社参道橋
明治 10 年代	1	野仲井路橋
明治 30 年代	5	柚木井路 1・2・3・4 号橋, 後藤家橋
明治 40 年代	1	緒方橋
大正 1～9 年代	7	上年野橋, 仮屋津留橋, 川久保橋, 野仲橋, 緒方下井路取水口橋, 川入橋, 川入水路橋
大正 10 年代	15	うち 13 基が 11～13 年製である
昭和 1～9 年代	4	柚木寺原橋, 六馬橋, 年神橋, 荒平橋
昭和 10 年代	4	あかたけ橋, 権現橋, 明正井路合川補水 1・2 号橋
昭和 20 年代	4	明正井路徳田補水 1・2・3 号橋, 小名子橋
不明	11	

緒方においては、近代以降、山間地を通る長距離水路が造られる。急峻な谷を越える水路もあり、水路橋が建設された。緒方の南部を通り、清川方面に至る明正井路には、水を運ぶための橋の架設がある。豊肥線鉄道開通と同時期に明正井路などでは水路橋が多く成立している。明正井路の成立により山間部の水利が整備され、受益地の農業発展が促進された。

豊肥線鉄道開通によるそれまでの交通事情の改善、利便性の高い交通を利用するための村境における道路交通整備、農業水利の整備。これらの事柄がほぼ同時期に行われ、大分県の郡部の近代化が進められていたことが分かる。

写真 4　長瀬橋（大正 12 年完成）

これらの近代化政策のために石橋が利用された経緯には、阿蘇火砕流の溶結凝灰岩の存在があげられる。緒方という地域は緒方川によって侵食された溶結凝灰岩によって形成されている。この岩の特性は他の火山性岩石よりも柔らかく加工しやすいことにあり、古来よりさまざまに利用されてきた。それまでの軟弱な土橋や木造橋に代わる巨大で丈夫な橋の建造に石材が用いられたのにはこうした背景があると考えられる。

農業を主な生業とする緒方の人々にとって水事情は非常に大切なものであった。山間部に水田（棚田）を持つ人々にとって明正井路は、なくてはならない水資源の要になったことだろう。また、当時の緒方村だけでなく周辺の村々にとっても安全かつ利便性の高い鉄道の存在は近代化の象徴のようなものであったろう。

写真 5　旧緒方村役場庁舎

そうした近代化を可能にしたのが石橋であり、豊後大野市の独特な風土である阿蘇火砕流の溶結凝灰岩からとれる石材であったことが分かった。